

〔書評〕 益川敏英 著

『科学にときめく』

小林 昭 三

一 日本語によるノーベル賞講演は史上初

冒頭は、歴史上で最もユニークで益川さんの人柄を浮き彫りにした味わいのあるノーベル賞講演。日本語によるノーベル賞講演も史上初の出来事。ユニークな生い立ち、科学への目覚めから説き起こし、「自国が引き起こした無謀・悲惨な戦争」、「小林さんとの共同研究でのときめき・苦闘・組合書記長の仕事・子育て・風呂を出る時のひらめき」等の生々しくたりは、ストックホルムの聴衆に深い感銘を与えた。私はインターネット配信映像で聴視し（英訳字幕で日本語講演を伝える制約でアドリブに富む益川節の名調子は抑制されたが）講演は「ノーベル賞講演史上の金字塔」だと感じ

た。

英語ぎらいの益川さんに関するエピソード（益川さんは、それ以前は国外不出で国宝級！）もさりげなく紹介されている。英語で行われなかった（フランス語での講演はあるが）今回のノーベル賞講演の例を経て、英語が絶対という認識は薄れてきたこと。ストックホルムとノーベル財団のおもてなしの心（日本で失われつつある）がまだ強く生きていることを感じさせたという「おもてなしの心深く感謝」。初めての外国旅行で「京都の木の文化に対比してストックホルムは石の文化」というくだり。益川さんは何事にも予測や想定をして臨み、それを実際と比較をする。初めての国外体験・ストックホルムでの経験は予測の範囲だったか？

実は、自分の目で見た海外は発見の連続だった！さらに、ノーベル賞後の騒ぎや忙しさは、はるかに想定外だった（予測の10倍以上と私も講演を益川さんに依頼した時に聞いた）。

二 名古屋大学物理教室の民主主義

「考え続けることが大切」。「多少、雑音が入ってきただろうが考えが進む」。「子供の理科離れ、受験制度に起因：教育汚染」。「高眼手低：目標は高く……着実にできることから積み上げ……」。「大学生への乱説の薦め」。「大学での学びは自学・自得」。「10年、20年後の変化にも耐える基礎学問を」。「100年後に役立つ科学も」。「研究評価のありかた」等々。そこかしこに益川節がさえわたる記述が見え隠れしてとても興味深い。

第3章には科学方法論についての益川さんの持論を展開した著述が集められている。その原点が「名古屋大学の物理教室で坂田先生が切りひらいた、研究室民主主義と教室憲章に端を発する、研究者の研究体制民主化についての「研究組織論の坂田哲学」と「研究方法論と坂田哲学」の著述。「なぜ研究する組織は民主的でなければならないか」、「なぜ先生といっではないけ

ないか」、「アルファベット順の著者名になった素粒子論分野の論文の伝統・起源」。私も名古屋大学で、それらを益川さんが博士課程3年の時以来、直に坂田哲学に接し益川さんらの研究者仲間から日々議論や体験を通して共に体得してきた。

名古屋大学で目指された「最良の組織と最良の哲学」。

戦中・戦後の名古屋大学の研究室制度・物理教室憲章の創成と全国共同利用の基礎物理研究所（湯川記念館）の経緯。こうして日本は仁科・湯川・朝永・坂田・南部・益川・小林へと素粒子論のメッカになった。

三 益川哲学を縦横に披瀝

「自然科学と弁証法」では益川哲学が披瀝されている。核心部分を引用しておこう。「パラダイムは……共通の概念・手法が広く適用できる安定した科学の発展のフェーズ（段階）を指すらしい。学問の方法論としては当然パラダイムの変化がどうして起こり、どのような過程を経て進行するかが重要になるが、パラダイム論ではこれらの分析が弱い様に見える。それは、唯物弁証法的視点が欠けている為だと私は理解している」。「パラダイム論が現れる数十年前に、……それは武

谷・坂田による学問の発展の法則『3段階論・自然の階層性の哲学』である」として、益川さんの無限の階層性の考え方は次のようである。「事物の性質・自然の特徴については、それは何故かと問うことが常に許されるといふ自然観に基づく。最終構成要素・最終法

則があれば、そこに登場する構成要素・法則に対し何故かと問うことが許されず、神がきめたとしか言えなくなるからである。この自然観から導かれる重要な結論はどのような法則にも適用限界があるという結論である」…として、身近なものの方についての「自然の階層性の哲学」の適用の仕方を詳しく紹介している。「視座を大きく変えたときに現れる事象・現象の法則性を議論する学だと考えている。…これは自然自身が弁証法的構造をしているためと考えられる」と。

四 平和と科学者の責任

第4章でこれだけは聞きたいというインタビューで益川さんの実像が浮き彫りにされる。

第5章では、益川さんの「平和と科学者の責任」をめぐる思考が熱く語られる。「子供や孫たちにあんな思いはさせたくない」。「なぜ改憲か―いま発言しない

と」。「絨毯爆撃から逃げた記憶」。「国家の名による戦争はいや」。「なぜ自衛隊をソマリアに派遣するのか」。「憲法9条は機能している」。…など益川さんの明快な平和への論理が展開されている。

最後の「戦争200年でなくせる」(2009年1月31日・「朝日」)は、その後にはオバマ大統領が核兵器廃絶を提言したが、その最近のプラハ講演(唯一の核投下国である米国は核兵器廃絶の責任を有する)により、益川さんの確かな未来への提言は、歴史的な輝きを増す。

「ぼくは…人間の歴史については楽観的。人間はとんでもない過ちを犯すが、最後は理性的で100年単位で見れば進歩してきたと信じている。黒人のオバマ大統領が誕生するなんてだれが信じたろう。能天気だと言われるかもしれないが戦争だつてあと200年くらいで無くせる」。明晰な見通し・提言、明快な論理、人間性にあふれた名著である。

(こばやし あきぞう・研究所理事長)
かがわ出版、2009年